

引きこもりがちな脳卒中障害者と家族が「初めの第一歩」を踏み出すためのイベント開催

後藤 みなみ ●特定非営利活動法人ドリーム 事務局員



脳卒中障害者が店員を務める喫茶店の様子

1. 背景と目的

引きこもりがちな脳卒中障害者と家族に外出のきっかけを作り、他者交流の機会増加につなげるためのイベントを開催する。脳卒中障害者は、ある日突然脳卒中によって後遺症を負ってしまう。仕事を失った人・友人と疎遠になった人・趣味を諦めた人など、社会から必要とされていないと感じ、生きがいを失い、引きこもりになってしまう人がいる。脳卒中障害者のうち、69.3%が病前より他人との交流が減少し、73.1%が後遺症を受け入れがたいと思っているというデータも出ている(脳卒中後遺症患者の生活実態調査、2018)。そのような脳卒中障害者にとって、外出のきっかけとなるようなイベントを開催する。

2. 取組みの方法／期待される成果

当団体が運営する「脳卒中障害者が店員を務める喫茶店」にて、「脳卒中障害者と家族のためのサービスデー(仮)」を計3回開催する。喫茶店は、脳卒中障害者や地域住民誰でも来店でき、脳卒中障害者・家族にとっては居場所の役割、地域住民にとっては脳卒中理解促進のための役割を担っている。イベント内容は、「脳卒中障害者・家族であることが特典となるようなサービ

ス(ドリンクなど無料)」「同じ経験をした当事者・家族と直接話ができる相談会」「当事者が講師を務める教室体験会」を行う。

引きこもりがちな脳卒中障害者は、外部の情報を得る機会が非常に少なく、情報を届けるには直接的に関わることができる専門家・支援者からの情報提供が必要だ。訪問看護ステーション・リハビリテーション病院などを中心に、計250か所の各種機関へ情報展開の協力を要請しチラシを郵送する。

このイベントは、引きこもりがちな脳卒中障害者と家族が、他者交流の機会を増やし、仲間をつくり、次第に障害と向き合って生活できるようになるための「初めの第一歩」を踏み出すきっかけとなる。「地下鉄に乗って喫茶店へ行けた」「悩んでいるのは自分だけではないと知った」「片麻痺があっても絵手紙を楽しめた」といった経験が、今後も外出の機会を増やすための非常に重要なターニングポイントとなる。

これによって、少しずつ外出に挑戦できるようになったり、定期的に喫茶店へ遊びに行けるようになったり、他者と会話を楽しめるようになったりするなど、次のステップへ進むことができる。このような経験を積み重ねていくことが、脳卒中障害者の社会参加につながると考えている。